

喪失の現象学？
——失っているもうひとつのもの——

中真生（神戸大学）

「喪失」とされるものには、死別、身体の一部や機能の喪失、関係の解消、故郷の喪失…などいろいろありうる。通常は、たとえば故人、手足、健康な身体など、第一に失った対象が注目されやすい。しかし、喪失体験が衝撃的なのはひとつには、それらの第一の対象を失うことで、それが大事なものであるほど、それに付随して失っている目に見えないものがあるからだろう。たとえば、それ以前の世界への楽観的な信頼や、自己像、自尊心、社会や家庭での役割、人との関係などである。本発表では、喪失体験の中から、死別、老い、関係喪失、認定されない喪失など性質の異なる様々な喪失経験を取り上げる。それらにおいてとくに、付随して失われているものに注目することによって、誰の目にも明らかな喪失経験だけでなく、ふだんはそれと気づかれない分りにくい喪失体験も無数にあることが浮かび上がってくる。このように、喪失という軸から見ることで、ふだん見えているのとは別の生の側面が照らし出されるのではないか。